

『悪の花』断罪詩篇

レスボス島<sup>1</sup>      Lesbos

ラテン的な遊戯とギリシヤ的な愛欲の母、  
レスボス島、そこでは太陽のように熱く、西瓜のように新鮮な  
気だるい愛撫、楽しい愛撫が  
栄えある日と夜の飾りになっている。  
ラテン的な遊戯とギリシヤ的な愛欲の母、

レスボス島、そこでの愛撫は滝のよう  
底なしの深みに恐れもなく身を踊りこませる滝、  
きれぎれに啜り泣き、くつくつと笑い、  
走りながれる滝、荒々しくひっそりと、うようよと深々と。

<sup>1</sup>ギリシヤの女流詩人サツフォーが住んだ島。

レスボス島、そこでの愛撫は滝のよう！

レスボス島、そこではフリユネ<sup>レ</sup>たちが互いに惹かれあう、  
そこではどんな溜息もこだまの返らぬことはなかった、  
パフォス<sup>レ</sup>にたいしてと同じように星々はおまえを讚美する、  
ヴィーナスもサフォーに嫉妬できて当たり前！  
レスボス島、そこではフリユネ<sup>レ</sup>たちが互いに惹かれあう。

レスボス島、気だるく熱い夜の土地、  
じぶんたちのからだに恋するくぼんだ眼の  
娘たちが、夜、鏡に映しあい（不毛な官能よ！）

—  
美貌で名高いギリシヤの遊女。不敬の罪に問われたとき、裁判官のまえで裸体になることによつて罪を許されたといわれる。  
ヴィーナスに捧げられたキプロス島の町。

熟れたとしごろの果実を愛撫している。

レスボス島、気だるく熱い夜の土地、

老プラトンの峻厳な眼はひそめさせておけばいい。

おまえは許しを手に入れる、しすぎるほどの口づけと  
あふれてやまない洗練の数々によって。

優しい帝国の女王よ、愛想のいい高貴な土地よ、

老プラトンの峻厳な眼はひそめさせておけばいい。

おまえは許しを手に入れる、永遠の殉教によって、

野心的な心へ絶えまなく課される殉教、

その心は、別の空のほとりで漠然と垣間みた

輝く微笑みに惹き寄せられ、われらから遠ざかってゆく。

おまえは許しを手に入れる、永遠の殉教によって！

神々のうちの誰が、レスボス島よ、あえておまえを裁くだろう、  
労苦に蒼ざめたおまえの額にどの神が罰をあたえるだろう、  
おまえのなかをいくつもの小川が海へと運んだ涙の洪水を  
神は黄金の秤をつかって計量してはいないのだから。  
神々のうちの誰が、レスボス島よ、あえておまえを裁くだろう。

義と不義の律法はわれらに何を望むのか。  
崇高な心をもつ処女たち、多島海のはまれ、  
おまえたちの宗教もほかの宗教とおなじように峻厳だ、  
そして愛は〈地獄〉や〈天国〉を笑うだろう！  
義と不義の律法はわれらに何を望むのか。

というのもレスボス島は地上の人間のなかでとくに私を選んだのだから、

レスボスの花咲く処むすめ女たちの秘密を歌うようにと、  
そのうえ私は幼いときから参入を許されていた、  
狂った笑いと暗い涙のまじりあう暗黒の神秘へ。  
というのもレスボス島は地上の人間のなかでとくに私を選んだのだから。

そしてそのとき以来私はレウカス島+の岬で見張っている、  
あたかも鋭く確かな眼をもつ歩哨のように、  
夜も昼も、遠く碧空のなかにその姿のふるえる  
ブリック型帆船、小船、快速帆船を警戒している歩哨のように、  
そしてそのとき以来私はレウカス島の岬で見張っている、

海は寛大で善良なのかどうかを知りたくて、  
そして岩に鳴り響く咽び泣きのなかに、ある夕べ、

絶望した恋人たちはレウカス島の断崖から海に身を投げた。サッフオーもそのひとり。

すべてを許すレスボス島へとサフォアの愛しい亡骸を

海は連れ戻すかどうか、それを知りたくて。彼女は身を投げた  
海は寛大で善良なのかどうかを知りたくて！

恋する女で詩人の、雄々しいサフォア

陰鬱な蒼白さのためにヴィーナスよりも美しい！

—— 碧い眼は黒い眼に負けた、その黒い眼は

苦悩によつてできた暗い隈に縁取られている

恋する女で詩人の、雄々しいサフォア！

—— 世界のうえにすつくと佇むヴィーナスよりも美しい、

じぶんの娘にうつとりしている老いたへわたつみに

清楚な魅力の宝やブロンドの若さの輝きを

注ぎかけているヴィーナス

世界のうえにすつくと侍むヴィーナスよりも美しい！

——自分の冒瀆の日に死んだサフォー、  
発明した典礼や信仰をみずから侮辱し、  
おのれの綺麗な体を粗野な男の  
極上の餌食にとさしだした、  
傲慢にも不敬を罰する粗野な男の餌食にと  
自分の冒瀆の日に死んだ女、

そしてこのときからレスボス島は嘆いている、  
全宇宙の表する敬意にもかかわらず、  
荒涼たる岸辺が空へむかってなげあげる  
嵐の叫び声に夜毎酔いしれている！  
そしてこのときからレスボス島は嘆いている！



地獄落ちの女

Femmes damnées

デルフィーヌとイツポリット

やつれゆくランプのあわい火影を浴びながら、  
匂いの染みた深いクッションのうえで、

イツポリットは力強い愛撫を夢みていた、  
うぶな若さの帳とばしをひらいてくれる愛撫を。

彼女は探していた、嵐に惑乱した眼で、  
すでに遥かなものとなった純朴の空を、  
ちようど旅人が、その朝越えてきた青い水平線へと  
頭をめぐらすように。

やわらいだ眼にうるむ気だるい涙、

ぐったりした風情、放心し、陰鬱な愛欲に沈み、

空しい武器のように、うち負かされた腕を投げ出している、

なにもかも、彼女のかよわい美しさに仕え、それを飾っていた。

その足もとに横たわり、静かに、悦びにあふれ、

デルフィーヌは熱い眼で彼女を包んでいた、

ちやうど強い獣が、まずは歯で咬み跡をつけ、

獲物を見張っているように。

たおやかな美女を前に膝まづく逞しい美女、

誇らしげに、彼女はうっとり匂いを嗅いでいた

勝利の美酒の。そして相手のほうへと身をのばした、

優しい感謝の印をもらおうとでもいうかのように。

彼女は探していた、蒼ざめた犠牲者の瞳のなかに、

快樂によつて歌われる言葉なき讃歌<sup>ほめうた</sup>、

また、長い溜息のように瞼から発する

あの果てしなく崇高な感謝の念を。

——「イツポリット、可愛い子、あんたどう思う？

今なら分かるでしょう、あんたの初々しい薔薇の

神聖な生け贄を、荒つぽく吹く風にあげたりしちやだめだつて。

そんなことしたらめちやめちやになつてしまう。

あたしの口づけは、夕方、広い透明な湖を撫でる

蜻蛉<sup>かひやう</sup>みたいに軽いわ、

でもあんたの男の恋人のは、荷車や鋭い刃をつけた鋤のように、

えぐったあとを深々とつけてゆく。

その口づけは何頭も繋がれた重い牛馬が

容赦なく蹄で踏みつけていくようにあんなの上を通っていくわ……

イツポリット、あたしの妹！ だからこっちを向いて、

あたしの魂、あたしの心、あたしの全部、あたしの半分、

あんなの眼は青空と星でいっぱい。その眼をこっちへ向けて！

神々しく匂いたつその魅力的なまなざしひとつと交換に、

もつと暗い快樂のヴェールを持ち上げてあげる、

そしてあんなを終わりのない夢のなかに眠らせてあげる！」

けれどもイツポリットは、若い頭をおこして、

——「わたし、すこしも恩知らずじゃないし、後悔もしていません、  
デルフィーヌ、でも苦しいの、不安なの、  
夜、おそろしい食事をとったあとみたいに。

どろりと落ちかかってくるのを感じるの、重くろしい恐怖や  
散らばっている亡霊たちの黒い大群。

わたしは連れていかれてしまう、ぐらぐらする道のうえ、  
血まみれの地平線にぐるりと閉じこめられて。

わたしたち、変なことをしちやったんじやない？

訳をきかせて、できるなら、わたしの戸惑いと恐れの訳を。

こわくてふるえてしまうのよ、あなたに『あたしの天使！』って言われると。

そのくせ唇はあなたのほうにいつてしまう。

そんなふうに見ないで、わたしのパンジー！

いつまでも愛しいあなた、とびっきりの姉さん、

でもあなたはきつと罨だわ

わたしの破滅のはじまり！」

デルファイー又は悲劇的な鬘をゆすりながら、

鉄の三脚台のうえで地団駄をふむかのように、

宿業の眼をして、居丈高な声で答えた。

——「愛をまえにしてよくも地獄のことなんて口にできるわね？

答えない不毛な問題に首をつっこんで、

何をとち狂っているんだか、愛のことがらに貞節をませこもうと

最初に思いついた、役立たずの夢想家なんて

永遠に呪われる！

影と光を、夜と昼を神秘的に調和させ

ひとつにしようと考えるやつに、

麻痺したじぶんの体を暖めることなんてできるもんか、

その名も愛というこの赤い太陽で！

行きたきや、お行き、馬鹿なフィアンセでも探しに。

駆けていつて、あげておしまい、生娘の心を、むごたらしい口づけに。

あんたは後悔と嫌悪とでいっぱいになって、土気色になって、

聖痕のはいった乳房をここに持つて戻るんだよ……

この浮き世、ひとりのご主人様しか満足させることはできないよ！」

けれども子どもは、測りしれない苦悩をあふれかえらせ、

だしぬけに叫んだ。「——感じる、わたしのなかに広がってゆく、

ぱっくり口をあけている。この深い穴、わたしの心だわ！

火山のように燃えている、空虚のように深い！

この呻いている怪物の飢えを充たしてやれるものなんてない。

手に松明をもつて、血まで灼きつくす

（エウメニデス）の渴きをうるおせるものなんてない。

閉ざしたカーテンがわたしたちを世間から隔ててくれるといい、  
ぐったりしたまま休息できるといい！

あなたの深い胸のなかでこの身を消してしまいたい、

あなたの乳房のうえでお墓の涼しさをみつけないの！」

——降りてゆけ、降りてゆけ、嘆かわしい犠牲者たち、

5  
復讐の女神。



永遠の地獄の道を降りてゆけ！

深淵のもつとも深い奥底へ沈んでゆけ、ありとあらゆる犯罪が、  
天から吹いてくるのではない風に鞭うたれながら、

ふきまく嵐の音をたてごちやませにふつふつと煮えたぎるところへ。  
狂った幽霊よ、おまたちの欲望の目的地へと駆けてゆけ。

おまえたちはけつしてその激情を鎮めることはできまい、  
おまえたちの快樂から懲罰は生まれるだろう。

爽やかな光がおまえたちの洞窟を照らしたことは一度もない。  
壁の割れ目から熱のある瘴気が

ランタンのように燃えながら滲み出てくる、

そして恐ろしいその臭いはおまえたちの体に染みこんでゆく。

おまえたちの悦楽はひりひりして不毛だ、

渴きはひどくなり、肌はざらつく、

吹きすさぶ愛欲の風は

古びた旗のようにおまえたちの肉をきしませる。

生きている人たちから遠く離れ、さまよえる、地獄堕ちの女よ、

砂漠をよぎり、狼のように走れ。

たがのはずれた魂よ、おのれの運命をまっとうしろ、

おのれのうちに持ち運ぶ無限から逃れろ！

忘却の河

Le Léthé

おいで、ぼくの心に、耳しいた残酷な魂よ、  
愛しい虎よ、平然とした風情の怪物よ。

ふさふさと厚みのあるきみの重い鬣のなかに、  
ぼくはふるえる指をいつまでも沈めていたい。

きみの匂いのたちこめるスカートの中かに  
ずきずきする頭を埋ずめたい、

しおれた花を嗅ぐように、

死んだ愛の甘いなごりを嗅いでいたい。

眠りたい！ 生きているよりも眠りたい！

死のように甘美なまどろみのなかで、

ぼくは悔いもなく愛撫をくり広げるだろう  
銅のように滑らかなきみの美しい体の上に。

ぼくの咽び泣きをしずめ呑みこむのに

きみの褥の深い穴にまさるものはない。

力強い忘却がきみの口に住んでいる、

忘却の河がきみの愛撫のなかを流れている。

ぼくの運命は、いまや喜び。

あらかじめ運命づけられた者のようにぼくは従おう。

あまりにも熱心なのでむしろ拷問したくなる、

おとなしい殉教者、無垢の罪人、

ぼくは、恨みをしずめるために、

ネペンテース。やおいしい毒人参を啜ろう、

一度も心を閉じこめたことのない

このとがった乳房の魅力的な尖端から。

。――  
悲しみや苦しみを消す魔法の飲料。

あまりにも快活なひとへ **A celle qui est trop gaie**

きみの頭、身のこなし、雰囲気は

美しい風景のように美しい。

笑いが表情のなかで戯れている、

澄んだ空のなかの爽やかな風のように。

陰気な通行人も、

きみとすれ違えば眼がくらむ、

その肩その腕からひかりのように

ほとばしる健康がまぶしくて。

装いのなかにきみのちりばめる

響きかなでる色は

詩人の精神のなかへ

花の舞踏のイメージを投げ込む。

その狂ったドレスは

きみのけばけばしい精神の象徴。

ぼくが惚れ狂っている狂女、

きみが好きだ、そしておなじだけ憎い！

ときどき、美しい庭園で

ずるずると無気力をひきずっていると、

ぼくの胸を太陽が

皮肉のように引き裂くのを感じた。

春と緑は

ぼくの心を辱めた。だから

罰してやった、一輪の花のうえで

〈自然〉の無礼を。

そのように、ある夜、

愛欲の時が鳴ると、

きみという人の宝物へ

ぼくは卑怯者のように、音もなく這つてゆき、

陽気なききみの肉を懲らしめ、

許されたきみの乳房を痛めつけ、

おどろくきみの脇腹に



大きな穴をぱっくりとあけ、

ああ、うつとりしてくらくらする！

一段ときらめき一段と美しい

この新しい唇をとおして、

注入したいんだ、ぼくの毒を、おお、わが妹よ！」

――  
裁判で『悪の華』からの削除処分を受けた「断罪詩篇」六篇を収めて出版された『漂着物』に、「刊行者の注」として、次のような注が付されている。「判事は、最後の二節に、血なまぐさいと同時に猥褻な意味を見出したと思った。詩集の厳肅さから見て、このような冗談は受け入れられない。しかし、毒がスプリーン「spléen 憂愁」やメランコリーを意味するというのは刑法学者にとってはあまりにも単純すぎる観念であった。彼らの梅毒菌解釈が彼らの良心の呵責とならんことを！」

装身具

Les Bijoux

最愛の女は裸だった、そして、ぼくの心を知っていたから、響きのよい装身具しか身につけていなかった、

その豊かな魅力のために、彼女には勝ちほこる風情があった、ムーア人の奴隷が幸福な日々<sup>に</sup>帯びているような。

踊りながら、浚刺とした、また蔑むような、音をたてると、

金属と石からなるこのひかり<sup>か</sup>耀<sup>や</sup>う世界は

ぼくを恍惚とさせる、そしてぼくは狂おしく愛する音が光にとけあう物を。

∞  
イベリア半島を支配したイスラム教徒。

そこで彼女は横になり、愛されるにまかせていた、  
そしてデイヴアンの上から気楽に微笑んでいた、  
断崖へむけてのぼるように彼女へむけてみちてゆく  
海のように深く優しいぼくの愛情にこたえて。

両眼をぼくにひたと据え、手なづけた虎のように、  
あいまいな夢みる風情で彼女はいろいろなポーズをとった、  
純真さと好色とがひとつになり  
彼女の変身に新しい魅惑がうまれていた。

腕と脚、太股と腰、  
油のようになめらかに、白鳥のようになよやかに、  
炯々<sup>けいけい</sup>と澄みわたるぼくの目の前を通っていった。  
その腹、その乳房、わが葡萄の房が、

悪の（天使）よりも愛らしく前へ進み、

ぼくの魂がひたつている休息を乱し、

静かにひとり腰掛けていた

水晶の岩からその魂をどかせてしまった。

ぼくには見える気がした、アンティオペーの腰と髭のない胸像が

新しいデッサンによって一つになっているのが、

それほどにも彼女の胴は骨盤を浮きたたせていた。

この鹿毛色で褐色の肌には紅白粉おしろいが絶品だった！

——ランプの炎はしおしおと息絶えてゆき、

暖炉だけが部屋をあかるませていたから、

6  
ギリシャ神話の美女。

それがめらめら燃える溜息をつくたびに、  
この琥珀色の肌は血の色に染まった！

吸血鬼の変身

Les Métamorphoses du vampire

そのあいだにも女は、燠火のうへの蛇のように身をくねらせ、  
またコルセットの針金のうえで乳房をこねながら、

麝香の沁みたこんな言葉を

母の口もとからあふれさせるのだった。

——「あたしつてさ、濡れた唇をしてる。ベッドにもぐりこんで  
古くさい良心をなくす技も知っている。

どんな涙もこの勝ちほこる乳房のうえで乾かすし、  
お爺さんたちを子どもみたいに笑わせてあげる。

一糸まとわぬ裸のあたしをみる人には、あたしは  
月や太陽や天や星々の代わりつてところ！

ねえ、可愛い学者さん、あたしは愛欲の博士なの、

この恐ろしい腕のなかで男を締め上げたり、

胸やおなかを咬むにまかせているときには、

おずおずとして奔放、なよなよとして強い。

だから、興奮して恍惚となるマッドレスのうえで

不能の天使もあたしのためになら地獄へ堕ちるでしょうよ！」

彼女はぼくの骨から髓をのこらず啜りとった。

ぐったりしながらぼくは彼女のほうへ向きなおり

愛の口づけを返そうとしたが、そのとき目にしたのは

ねばつこいわき腹をした革袋ひとつ、しかも膿でいっぱいだった！

冷え冷えとした恐怖のなかで、ぼくは両目を閉じた。

それから生き生きした光のもとでふたたび目を見開いたとき、

ぼくの横には、血を溜めこんだかに思われた

力強いマネキンのかわりに、

骸骨の残骸がまぜこぜになって震えていた、

そいつらはみずから風見鶏のような叫び声をあげていた、

あるいは、鉄の横棒のさきで、冬の夜すがら風に揺られる

看板のような叫び声を。